

表現'96 リアル

身体編

現代美術家、三上晴子の新作は見る者の身体を内側から揺さぶる。三月に開く個展の目玉は、コンピュータの仮想空間に生息する人工生命体と、観客の身体が融合する作品だ。

観客はまず映像装置付きの大型眼鏡をかける。途端に三上が作り出した人工生命体の「分子」の世界が映し出される。分子は観客の眼球の動きに応じて分裂したり、運動したりする。観客は、人工生命体の内部をのぞき込む体験を

× × ×

ここでは自分の身体と人工生命体、現実と仮想現実の境界線はきわめてあいまいだ。しかし、それはこの作品に限った話ではない。電話を耳、テレビを目とし、記憶すらも

コンピュータのメモリーに任せつつある私たちは、もはやバーチャルリアリティー(仮想現実)の世界の住人な

仮想空間の人工生命体

④



尚「ニューニク」の人工生命体「ロベイ」の反応する人の子

のだ。
「バーチャルリアリティーから、リアルバーチャル(現実的仮想)へ」。三上この言葉からは、仮想現実を巻き込んでこそ、現代における私たちの身体が「リアル」な存在として描ける、という意識

現実との境 あいまいに

「人間が制御できない、気分を織り込んだことが「リアル」さを生んだ」と手塚はいう。生物の外見ではない。自立した振る舞いが生命に対する愛情を生む。「庭に咲いている花よりも人形に生命を感じる瞬間もある。重要なのは物理現象としての生命ではない」(手塚)。

× × ×

が読み取れる。身体が仮想化すればするほど、身体に代わる確かな根拠を、生命の触りを求める衝動がわき上がる。従来絵画が求めてきた「生命感」では間に合わぬ。現代の

しかし、生命の描き方は一様ではない。富士通と協力した映像作家の手塚真にとっ

「人間が制御できない、気分を織り込んだことが「リアル」さを生んだ」と手塚はいう。生物の外見ではない。自立した振る舞いが生命に対する愛情を生む。「庭に咲いている花よりも人形に生命を感じる瞬間もある。重要なのは物理現象としての生命ではない」(手塚)。

科学的に極論すれば、身体は機械に機能を奪われ、心は脳の電氣的信号と定義される。肉体は遺伝子の船に過ぎないとする説明されてしまふ

赤ん坊の姿をした人工生命体を作り出した現代美術家の土佐尚子にとっては、生命は「反応」と同義語だ。画面に映った赤ん坊は、観客のしゃべる語気から気持ちを感じ取り、喜怒哀楽を表す。観客の連続した呼びかけで、別の反応を示すこともある。もともとビデオ作家だった土佐は、

(敬称略)